

これまでの川とのつきあい

地域産業
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん



サケの水あげ(大津漁港・豊頃町)。人工ふ化(左上)のおかげで、サケはたくさん帰ってくるようになり、多くの人が食べられるようになった。(右下)今は十勝の川からいなくなったチョウザメ。(浦幌町立博物館: 1)

江戸時代には、アイヌ民族の交易が和人の支配下に入ります(p137)。とくに沿岸や河口部でのサケ漁が、暮らしに必要な分をとる形から、たくさんとる形に変えられていきます。やがて、サケの数が減っていきました。明治に入り、漁師の人たちは、サケを増やす努力をはじめます。川をのぼるサケをつかまえ、卵をとり、人の手で子どもをかえし放流する「栽培漁業」が始まりました。サケの一生のうち、産卵とふ化を人の手で助けることによって、サケの数は増えていきました(p174)。一方で、川の形は変えられ、サケに限らず、自然に産卵できる場所が少なくなりました。人工ふ化がされていないイトウや多くの川魚は少なくなり、チョウザメはいなくなりました。

暮らしに合わせてつくりかえられた川



(上)まっすぐな帯広川下流部(帯広市)。多くの川が「流れやすく」つくりかえられた。



(右)昔の帯広川のおもかげを残す旧帯広川(帯広市)。

開拓が始まると、森や草が切り開かれて農地にすがたを変えていきます。十勝にも、それまで住んでいた人数の何倍も何十倍もの方が暮らすようになります。今もそうですが、自然のめぐみだけでは、これだけの人間が生きていくことはできません。田畑があり、肥料をまくことで、作物がとれ、食べるものが手に入ります。農地にとっての自然の川は、農地をうるおしてくれる一方で、洪水によって、できたはずの作物をうばい去るものでした。住宅地にとっても同じです。(p186) とにかく、洪水を減らすこと、続いて、農地をうるおし、電気を起こし、水道を引くことが考えられました。川は、それに合わせて、つくりかえられてきました。

人が増え暮らしが豊かに = 川の力は小さく

農地が増え、住宅地が増え、洪水が減り、サケは増え、そして人は増え、暮らしは豊かになってきました。

一方で森は減り、もともとあった動植物は減り、川魚は減り、川の持っていたさまざまなのは、小さくなってきました。

また、住宅や農地、工場などから出るよごれは、量が非常に増え、また、自然にないものも増えました。そのまま地下水や川に流すと、自然や川の力では、きれいにできなくなり、公害が起きるようにもなりました。(p174)



なかなかあわが消えない川の水は、よごれていることが多い。

1 浦幌町立博物館(うらほろちょうりつはくぶつかん): 浦幌町字桜町16-1(らぼろ21内)電話015-576-2009 月曜日休館